

実家の匂い

立命館慶祥高等学校 高橋 伶奈

買物からの帰り道、漂ってきた煙草の匂いに私はしばらく身動きが取れなかった。路上喫煙が厳しく制限されているこの時代に、五十代くらいの黒いコートを着た男性がこちらへ歩いて来る。手に持ったたばこを吸い、息を吐き出すと白い煙が彼を包み込む。呆気に取られているうちに、彼はずんずんと私の横を通り過ぎた。さっきよりも強いタバコの匂いに釣られ、私は両親のことを思い出した。私の父は漁師で、母はその手伝いをしている。漁をするというのは、ただ魚をとって終わりという訳ではない。網に引っかかった魚を手作業で外し、魚の大きさごとに仕分けをする。その数をノートにまとめ、漁業センターに出荷するまでが一連の流れだ。

漁に使う網の手入れ、仕分けをする時に使う機械の掃除など、ネット検索では知りえない、忘れられがちな作業が細々と存在する。

さらに、書類上、職業は自営業という分類に属しているため、税理士を雇って確定申告をしなければならない。また、たくさん魚が掛かった日は、足りない人手を補うために、同業者仲間に連絡をして手伝ってもらう。その逆も然りである。繁忙期の夏は言い表せないほど忙しい。太陽が傾く頃、二人は仕事から帰ってくる。ひと段落できるかと思えば、明日に備え、すぐに布団に入り泥のように眠る。父は夜中に目を覚まし、仕事場へ向かう。母は私の朝ごはんを作ってから手伝いをしに向かう。朝六時のことである。そのような日々が夏の間続く。週休二日という制度は、漁師には存在しない。漁に出られるときは出る。それだけのことである。そのような日々をやり遂げるためにも、二人にとってたばこは特別なものであった。Marlboro と書かれた赤と白の箱から煙草を取り出し、火をつけ肺一杯に吸い込み煙を吐き出す。たばこ独特の嫌らしい匂いが部屋に充満し、暫くこびりついて離れない。煙草は決まってMarlboro であり、それ以外を吸っているのを私は見たことがなかった。二人とも喫煙者のため、私の家は、いつもたばこの甘い匂いが漂っていた。円形の、中が紺色で塗られている灰皿がテーブルに一つ。小さなホールケーキくらいの大きさで、吸い殻ですぐ満杯になるため、毎日取り換えなければならなかった。ヘビースモーカーというわけではないが、一定の量を吸っていたと思う。白かった壁は年々黄ばんできており、鼻を近づけて匂いを嗅いでみると、微かにニコチンの香りがする。「煙草は体に悪い」とか、「肺がんになりやすい」とか小学生の頃にはそういった認識が世の中に浸透していた。たばこのパッケージに

も、煙草を吸うことによるリスクが示されるようになっていた。幼いころは大切な両親の寿命を縮めるたばこのことが憎くて仕方なかった。しかし、あのような生活を乗り越えるために必要不可欠な物であったと思うと、憎むどころか妙な親しみさえ感じる。毎日のように嗅いでいたあの匂いがひどく懐かしい。寮暮らしの今、煙草の匂いを嗅ぐことはなくなった。最初のころは、両親の匂いがしないことがひどく寂しく、心細かったが、日々の忙しさに気を取られ、いつしか両親のことを気に掛けることもなくなった。しかし、あの男性の、しかも両親が吸っていたMarlboroの煙草の匂いが引き金となって、波のように色々な感情が私に襲いかかってくる。私のそんな感傷を、その煙草を吸っていた男性が知る由もなく、ふと気づいたときにはその男性はいなかった。私は彼が歩いて行った方向を向きながら、両親は何をしているのか考えた。今は夕方の五時。きつと早めの夕食を食べて、二人で食後の一服をしている頃だろう。早めに帰って両親に電話しよう。そして、今日起きたことを話そう。私は道を急いだ。雪が降る日のことだった。